

ウサギの複数飼育

ウサギを複数飼い
するとどうなるか？

ウサギは、毛がホワホワして優しそうな顔をしているのでおとなしい動物と見られがちです。たくさん飼えばかわいさいっぱいでは、とってしまいますが、実はオスは縄張り
を確保するために激しく争い、メスも負けず嫌いで気の強い動物なのです。

また、とても繁殖力の強い動物で、生後4ヵ月から妊娠する可能性があり、妊娠すると
1ヵ月で出産します。つまり生後5ヵ月で母親となり、その5ヵ月後にはその子どもたち
が親となっていて、夫婦のウサギは1年もたたないうちに、孫がたくさんいるということ
になるのです。

交尾から離乳までに約2ヵ月ほどなので、年4回～8回出産することが可能です。

避妊や去勢をしないで自然にまかせると、ネズミ算に似て、オスメス1組のウサギが2
年以内に100匹以上となる計算(ウサギ算!?)になります。ともかく過密状態になれば
ケンカも多く、正常な子育てはおろか、食事や排泄の管理もゆき届かなくなり、さまざま
な問題が出てきます。

生後4ヵ月ごろまではオスメスの見分け方も難しく、尿道の開口部で見分けますが、オ
スメス両方を見比べないとわかりにくいのです。そのため、オス同士・メス同士で飼った
つもりが、いつの間にか妊娠していることもあります。

複数飼いによる病気・トラブル

外 傷

一見おとなしそうですが、たいへん神経質で気の強いウサギが多いので、複数飼いにす
るとオスメスはもちろん、オス同士・メス同士でもケンカをします。

切歯(前歯)は、オノのように鋭いので、かまれると、深く刃物で切ったような傷がで
きます。化膿することもあります。

管理不十分

数が増えると管理が行き届かなくなり、爪が伸び過ぎていて折れて出血したり、不正咬
合の歯が伸び過ぎたりします。

伸び過ぎた歯は舌を傷つけたり、頬を化膿させたりすることもあります。またケージの
手入れが悪いと、排泄物などが毛や皮膚について、皮膚炎が起きたり、食物が腐ってい
たりして下痢をすることもあります。

感 染 症

1匹が感染を持っていると、同居のウサギ全部に移ってしまいますことがあります。ウイルス性出血病やパストレラ菌の感染に気をつけましょう。鼻汁・クシャミ・目ヤニなどが出たり、病気や食欲がなくなったりすると要注意です。

真 菌（カビ）

犬小孢子菌・白癬菌などのカビに感染しているウサギが1匹でもいると、他のウサギにも移ることがあります。皮膚が丸く脱毛し、カサカサした状態になります。

寄 生 虫

腸内にコクシジウムという原虫がいると、便に排泄されるため病気が広がります。下痢を起こしたり、病気や食欲がなくなったりします。耳に耳ダニ（耳疥癬）が寄生すると、耳の中に黒いカサブタのような分泌物がたまります。皮膚につくツメダニやノミも移りません。

子育ての異常

ウサギが増え過ぎると、交配の機会も増え、1年間に8回出産することもあるといわれています。母体への負担が多くなり、衰弱したり寿命が短くなったりしやすいでしょう。また過密になると、落ち着いて育児ができなくなり、巣をこわされたりするので、ストレスが増して無乳症になったり、育児が妨害されるために授乳をやめてしまったり、子ウサギを食べてしまったりすることもあります。

トラブル解決（治療）

外 傷

かまれた傷は細菌が入って化膿しやすいので、すぐに病院へ行き消毒しましょう。小さい傷でも皮膚に穴があく深さのときは、奥まで菌が入り込み化膿することが多いので抗生物質を与えます。

管理不行き届

爪が折れたときは消毒をします。折れかかってブラブラしていると特に痛いので、病院で切り取ってもらうなどの適切な処置を受けます。歯の不正咬合は、わかった時点で短かく削ったりして治しましょう。皮膚炎が起きているときは、まずその部分を清潔にしてから薬をつけましょう。

感 染 症

感染症はひどくなると全身の状態が悪くなるので、早めに動物病院へ連れていき、必要な治療（症状に合わせて目薬・飲み薬・輸液など）を受けましょう。

真 菌

病院で検査を受け、菌に効く内服薬や外用薬を使って、病気が広がらないようにしましょう。

寄 生 虫

検査をして、その虫にあった薬で、駆除しましょう。

子育ての異常

出産前後のウサギは別に隔離し、他のウサギに育児のじゃまをされないようにします。

予 防

1匹ずつ別々のケージで飼うようにし、人が見ている時だけ一緒に遊ばせるようにすると、大きなケンカにはならないでしょう。

気が合わないウサギ同士は一緒にしないようにします。増え過ぎるとどうしても管理が行き届かなくなるので、オスとメスを一緒にさせないようにしたり、避妊・去勢の手術をして妊娠させないようにしましょう。

特に初めてウサギを飼う場合は最初からたくさん飼わずに、上手に管理できるようになってから、1匹ずつ増やしましょう。

新しくきたウサギは、パストレラ感染症・真菌・寄生虫など移る可能性のある病気を持っているといけないので、検便・健康診断などを受けて異常のないことを確認しましょう。そして、3週間くらいは別々にして飼い、病気の有無や相性を見ながら、仲間入りさせます。

病気が蔓延してしまったり、数が増え過ぎてから慌てるのではなく、十分計画性を持って数を増やし複数飼いを楽しめるようにしましょう。

他の動物との同居問題

どんな動物も小さいときにどういう動物や人に接したかで、他の動物と仲よくできるかどうかが決まります。一緒にするとき子どもの動物はすぐなれると思われませんが、大人の動物は、神経質になったりしやすいので、徐々に馴らすようにしましょう。

ウサギはデリケートで神経質な動物です。おっとり穏やか優しそうに見えて本当は気が強くやきもちやきのところもあります。

先日からわが家では、ウサギのプー（2歳）と犬のモースケ（13歳）に、子猫のジジ（生後1ヵ月半）が仲間入りしました。モースケはフレンドリーな性格なのでプーともジジともトラブルなく過ごしています。ところがプーは、初めからいるモースケには無関心

ですが後からきたジジを追い回して小屋に逃げ込ませた日もありました。でも最近はジジも大きくなってきて対等に追いかけて回し鬼ごっこのようにお互い牽制し合っています。ジジはモースケもプーも好きで遊んでほしそうなのですが、プーはジジを嫌っているのです。

わが家の経験もふまえてお話しすると、

- 1・動物種というよりその動物個々の性格によって仲よくなれるかどうかで決まる。
- 2・初めからすぐ一緒にしないでお見合いを一定期間させる。人の見ているところで徐々に一緒にする。
- 3・気の合わない同士は、無理に一緒に遊ばせたりしない。
- 4・他の動物にもいえるが、おっとりしたタイプ・ひとなつっこいフレンドリーな性格のウサギは、どの動物ともうまくやっていける。

ということのようです。そして基本的に、初めからいる動物のほうから優先してかわいがるようにし、「ただいま」も食事も遊びも順位をつけると、うまくいくことが多いと思われます。

コラム 邦一式 ニッパーのひみつ

うちの病院では、6年前からや夜行性のサイレントアニマルが来院し始め、兎年を迎えてからは、ウサギがぐんと増えました。みんなを悩ませているのが一生伸び続ける歯の症例です。

昨年、夫は獣医師向けの通販の会社に頼まれて、ウサギの歯のハンコを作るアドバイスをしました。カルテにこのハンコを押して、どこに病変があったかを記入するのです。これが好評で、今回はうちの病院で使っている門歯の不正咬合用のニッパーを商品化しようということになりました。岐阜県で医療用のハサミを先祖代々作っている会社のHさんという好青年が、わざわざ横浜まで来てくれました。

夫が発明したそのニッパーは.....ホントは企業秘密ですが、世のためウサギのためここで発表しようと思います。ウサギの伸び過ぎた門歯は、本来なら歯科用エンジンで歯を削ってトリミングするのが理想です。しかし、設備費もかかるし、ウサギが怖がらないようにしなければならない、などの問題で、ニッパーを使うこともあります。

普通のニッパーを使うこともあります。ところが、普通のニッパーでウサギの歯をカットすると、力が1ヵ所にかかるため、歯が碎けて縦に裂けてしまうこともあります。新しいカット剪刀は、刃がギザギザと溝がついています。これだと刃をはさんだときに、数ヵ所同時に力がかかるのでミシン目のような作用でカットされるため、軽い力で切断しやすくなりました。また刃の長さも短くしたので、唇や舌を傷つけにくくなっています。

Hさんは産まれたときからハサミに囲まれて育ち、物心がついた頃からハサミが大好き。普通の人(獣医師を含む)は、このニッパーを見せても「へー、すごいねー」と言うもの

の聞き流す友が多いのですが、彼は手に持つとなでるように触り、コピーを取り、そのうえ、手術用顕微鏡で溝の掘り片を覗き込んだ。たった1本のニッパーに費やした時間は約2時間、夫と2人で額をくっつき合わせて議論を交しています。お茶菓子にも手をつけずに2人とも夢中です。

「ウサギの市場はまだまだ犬猫ほどじゃないから開発して売り出しても赤字じゃない？」という私の心配をよそに、少年に還ったように目をキラキラ、夢追い人のようです。「売れるとか儲かるとかじゃなくて、これは世の中に必要なんです」とHさん。夫は自分の考案した物を会社が作ってくれるなんてうそみたいと、半信半疑のようです。

タネを明かすと、そもそもこのニッパーのきっかけになったのは末娘なのです。工作と動物が大好きな娘は、ハムスターの小屋の扉を改善しようと、夫が丹念にといたニッパーを使って、バキバキと太い針金を切ったのです。刃がボロボロにこぼれ「なんてことするんだ！」と思ったのですが、ある日うっかり使ったこのニッパーがウサギの刃を切るときに滑らなくてうまくいくことを発見したのです。

発明や発見って、こんな小さな偶然から生まれることもあるんですね。